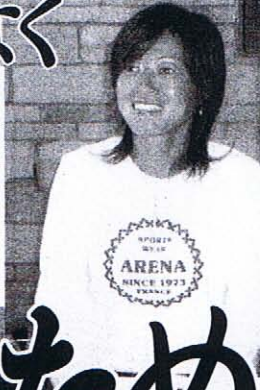
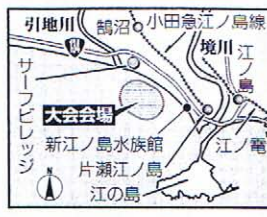


14連覇挑むビーチフラッグス女王
遊佐雅美さん



第32回全日本ライフセービング選手権大会(主催：日本ライフセービング協会)が10月7、8日に神奈川県藤沢市の片瀬西浜海岸で開催される。この一年間に全国の海水浴場で監視・救助活動などを行ったライフセーバーが参加、鍛錬してきた泳ぎも走り、水難救助



の技を競うもので、個人や団体など計12種目で日本の頂点が争われる。その目的は救助の際に求められる技術の向上だ。ビーチフラッグス種目で前人未到の14連覇に挑む遊佐雅美さん(33)はライフセービング競技と救助のかかわりに関心していた。

◆遊佐 雅美(ゆさ まみ) 1976年(昭和48)の月10日、神奈川県川崎市生まれ。西浜サウナクラブ・ビーチフラッグス所属。94、97、00年ライフセービング世界大会で優勝。現在、全日本ライフセービング選手権ビーチフラッグス種目で14連覇中。

すべてはレスキューのため



遊佐雅美さん

大会で勝つことも誇り...それより無事故で過ごすことがうれしい

目下許されない 遊佐さんは昔は目撃された美が似合う普通の女性だ。だが、ビーチフラッグスのスタートライに並ば、周りの歓声が聞けなくなるほどの集中力を見せる。その極度に安全をライフワークとする誇りと強い信念がある。

ライフセービングを始めたきっかけは、14年に専門学校で学んだ救急法の授業にある。「あなたは愛する人が目の前で抱かれていて助けられますか?」と聞かれた時、「もし自分の子供がけを求めていると今の自分では(足もできない)と気が付いた。そして、大切な命を守ってあげたい」と強い信念が沸き上がった。

泳ぎは得意な方ではなかった。が、ビーチフラッグスに習い、この種目の中には自分の得意するものがあると感じた。中学時代は陸上系の中距離・高校では短距離を経験していたから、(砂浜で行う)この種目にはある程度の姿勢からスタートし、20分離れたところまでランニングを取合う、開発力・集聚力、そして一瞬の判断力求められる。人命救助と同様に1つのミスも許さない。始めて1年もたない98年の全日本選手権で初優勝以来、この大会では13年間負けがない。

海浴の期間 海を泳ぐ時間 夕方の後片付けまで自分の時間は全くない。いわけ遊泳時間中は汗も盛況の目を離すわけがない。練習するだけでもできない状況だ。それでもレスキューのナンバーワンは競技の「ワン」と言われて頑張る。競技のためには鍛えるのではない。すべてはレスキューのためだ。「大会で勝つことも誇りかもしないが、ライフセービング活動をする夏場の月1回間を事故で過すことの方がうれしく」と4年前の持ちは種々のことではない。今年も江の島が練習の場に広がる片瀬西浜海水浴場で監視・救助活動を務めた。

人々に海の怖さを理解してもらおうと「JLA」起りながら、細心の注意を払って泳ぐ状態だ。「私たちがレスキューに動くような状況や然に防ぐことが大事。そのため、海でも一人一人にできるだけ話しかけるようにしています。各自が自覚を持つようには手助けをするのが、ライフセーバーの真の役割なのだ」と認識している。14連覇を目指す今年の大会会場は片瀬西浜サウナクラブ・ビーチフラッグスの拠点、片瀬西浜海岸。信念を持ち続け、磨いてきたビーチフラッグス種目で14連覇中。